

出エジプト記 3 : 1～6

ルカによる福音書 20 : 27～40

「生きている者の神」

【前奏】

【招詞】 イザヤ書 12 : 4～6

【祈祷】

【聖書】 出エジプト記 3 : 1～6、ルカによる福音書 20 : 27～40

【説教】 「生きている者の神」

<復活があるか、ないか>

ここしばらくの聖書箇所は、イエスさまがエルサレムの町に入られてから、十字架に架かれるまでの一週間、受難週の歩みが語られています。

その間に、民衆の人気を集めるイエスさまに敵対心を抱いた、律法学者やファリサイ派と呼ばれる人々が、イエスさまを貶め失脚させようと、色々な論争を仕掛けてきました。

今日は、新たに「サドカイ派」という人々が登場します。

サドカイ派とは、ユダヤ人の中でも上流階級の人々が属していたグループです。特に、神殿の祭司を中心としていました。

サドカイ派の特徴は、今のわたしたちで言う「旧約聖書」の中でも、「モーセ五書」と呼ばれる、創世記から申命記までの五つの書物を特別に重んじていた点です。このモーセ五書をすべての基準として判断していました。

そうした特徴から、27 節に「復活があることを否定するサドカイ派の人々が」とあったように、彼らは「復活」ということを否定する立場を取っていました。

この「復活」は、今のこの世で、病気で亡くなった人が生き返るような奇跡が、起こるか否か、という議論ではありません。そのような死からのよみがえりであれば、その人はそこからまた年を取って、いつかまた死ぬ日が訪れるでしょう。

そうではなくて、ここで論じられている「復活」は、この世の終わりの日に、救いの完成として起こる「復活」のことです。この世が終わった後に、永遠の命を生きる、そんな体のよみがえりが、あるかないか、ということです。

旧約聖書の中でも、比較的新しい年代の書物には、「復活」を示唆するようなところがあります。しかし、サドカイ派が規範とするモーセ五書には、そのようなことがはっきりとは書かれていないのです。

だから、彼らは復活などない、と言って、復活のことを語っているイエスさまに、論戦を挑んだわけです。

しかしまた、復活があるかどうか。これは今も、世のすべての人にとって、わたしたちにとって、一つの関心事なのではないでしょうか。死んだらどうなるのか。それで、自分のすべてが終わるのか。その先があるのか。あるとしたら、それはどんな風なのか。

もし、死んで終わり。復活などない、としたら。それは、生きている間のことだけが、すべて、ということです。

その場合には、この世で生きている間に、どれだけ良い思いをするか。たくさんものを手に入れ、成功し、自分の目標を達成できるか。そういうことが大切になってくるでしょう。そこにこそ意味がある、ということになるのでしょう。

しかし、もし、この世のことを超えた希望があるのなら。復活を信じる者は、この世のことにはばかり執着しなくてもよい、まったく新しい生き方、まったく新しい目的を、見つめることが出来るのではないかと思うのです。

<復活したらどうなる？>

さて、サドカイ派は、イエスさまにどのように挑んでいったのでしょうか。28 節にはこうあります。「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。」

これは、モーセ五書の中の「申命記」25：5～6 に書かれていることです。当時のイスラエルにおいて、後継ぎが与えられることは、神の民の一員としての祝福が続いていく、ということであり、大変大きな意味を持っていました。それで、律法において、その家の跡継ぎを絶やさないように、そのような定めがあったのです。

そうして、サドカイ派の人々は、それを元に、とても極端な例を出しました。

それは、七人兄弟がいて、長男が妻を迎えた。しかし、子どもがないまま、長男が死んでしまった。モーセの律法に従って、次男、三男と、この残された妻を迎えたが、みんな子どもがないまま、七人とも死んでしまった。最後に、この妻も死んだ。さて、この妻は復活の時、誰の妻なのか。そういう問いです。

つまり、この妻は七人みんなの妻だったのです。では、復活した世界では、誰の妻か。みんな復活して生きているのであれば、この妻は多重婚をしていることになります。それは、律法においては大変重い罪なのです。そんな矛盾したことが起こるのはおかしい。だから、次の世なんてない、復活などない、と言うのです。

これは、議論のために語られた例で、なんだか屁理屈のようにも思えます。

しかし、実際、わたしたちも「復活」ということを考える時、同じようなことを疑問に思うかも知れません。

今の時代だって、愛する伴侶を亡くして、その後に再婚する人もいるでしょう。復活して前の伴侶が現れたら、どうなるのでしょうか。

それに、愛する人、とつても仲の良い人と、復活してまた会えたら嬉しい、と思うかも知れませんが、仲が悪かった人、苦手と思っていた人、会いたくない人だって、復活したらそこにいるに違いありません。

それに、以前もお話したことがあるかも知れませんが、復活のことで、若い時に夫を先に亡くした、お年を召したご婦人が、こんな疑問を持っていました。「復活の時、死んだ姿でよみがえるなら、夫は若い姿だけけれど、わたしはおばあちゃんになってしまっている。あの人は、わたしのことが分かるかしら。」

また、ある青年は言いました。「僕は、自分の顔も、体つきも、何もかも嫌い。だから、こんな体で復活するなら、復活はいらない。復活したくない。」どれも、切実な問題です。

でも、サドカイ派も、また先ほどのような疑問をもつ人も、根本的に「復活」の考え方が間違っているのです。

七人の兄弟と結婚した妻のことも、仲の良い人、悪い人のことも、伴侶のことも、体の不自由さや、姿形にしても。それらは基本的に、復活しても、この世の続きをそのまま生きているかのように考えられているのです。

この「復活」についての問答は、マタイ福音書にも、マルコ福音書にも語られています。そしてマタイでは、イエスさまがはっきりとこのように告げておられるのです。

「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、思い違いをしている。」(マタイ 22 : 29)

聖書も、神の力も知らない。分かっていない。だから、思い違いをしていると。

では、わたしたちは、どんな思い違いをしているのでしょうか。

#### <天使に等しい>

まずイエスさまは、人を復活させる「神の力」について教えられました。34～36節です。

「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。」

まず、復活にふさわしいとされた人々は、もはや死ぬことがないのです。つまり、永遠に生きる者とされるのだから、後継ぎを残すために、結婚したりする必要がない。そのような、この世の制度に従っていく必要がない、ということです。

そして、天使に等しい者になる。復活にあずかる者として、神の子となる、と言われていきます。天使に等しい者。それは、永遠の命と新しい体を持って、永遠に神に喜んで仕える者となる、ということです。

つまり、「復活」とは、この世の人生の続きを生きるのではなく、わたしという存在が、命も、体も救われて、神さまの御手によって完成された者とされる、ということです。

そしてそれは、わたしたちの隣人との関係もすべて、神さまが完成させて下さるといことです。

復活することは、この世がそのまま次の世へ続いていくことではありません。しかしまた、この世で生きたことが無かったことになる、リセットされる、ということでもないでしょう。

わたしたちはこの世で、打ち解けて、心あたたかい交わりを築けることもあれば、互いに傷つけあうような、どうにもならない破れを、共に抱えて生きなければならないこともあります。どちらにせよ、罪深いわたしたちは、この世で完成に至ることは出来ません。

しかし、そのようにしか歩めないわたしたちを、神の御子イエスさまが、すべてご自分の十字架に担って下さったのです。イエスさまが、ご自分の命によって、わたしたちの罪の破れを覆って下さったのです。

そうして、イエスさまに覆われ、赦され、癒されて、わたしたちはこの世の日々を歩いていきます。やがて、この世の命を終え、終わりの日。復活の日が来たら。わたしたちは、神さまの御前に立ち、罪の赦しを宣言され、傷を癒され、新しくされ、救いの完成に与ります。イエスさまに結ばれた兄弟姉妹と共に、喜びのうちに、天使のように、永遠に神に仕える者とされる。そのような救いの完成こそ、終わりの日の「復活」なのです。

#### <聖書から>

さて、イエスさまはもう一つ、「あなたたちは聖書を知らない」と言われました。

サドカイ派は、聖書の中でもモーセ五書を重んじる人々であり、そこに復活のことが記されていないから、復活を否定しているのだ、と最初の方で述べました。

そこでイエスさまは、モーセ五書に書かれていることから、「復活はある」ということを証明なさったのです。それが、37節以下です。

「死者が復活することは、モーセも『柴』の箇所、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、示している。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。」

イエスさまは、「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである」と言われました。

「すべての人は、神によって生きているからである」。これは、直訳すると、「すべての人は、神に向かって生きている／神に対して生きているからである」となります。

神さまに向かって生きる。これこそ、造られたわたしたち人間が、本当に「生きている」といことです。

つまり、わたしたちは、わたしたちの命をお造りになった神さまによって、神さまに向かってこそ、神さまとの交わりの中でこそ、生きることが出来る者なのです。

それはまた、神さまから離れたら、わたしたちは生きられないということです。

聖書が語る「罪」とは、神さまに向かわない、ということです。命の源である神さまから離れること。背くこと。向くべき神さまの方向を、向かないことです。それは当然、命そのものから離れることとなり、わたしたちは死へ、滅びへと向かっていくのです。

しかし、神さまに向かって生きるなら。神さまに繋がって、神さまとの交わりの中で、神さまの恵みに生かされて、生きるなら。わたしたちは、生きる者とされるのです。

それは、この世で、この肉体が死を迎えても、さらに永遠を生きておられる神さまに、生かされていく。永遠の命を与えられ、復活の体を与えられ、神の子として、天使に等しい者として、復活の命を生きていく者とされるのです。

イエスさまが例に出された、モーセの『柴』の箇所とは、今日読まれた旧約聖書の出エジプトの箇所です。これは、モーセが神さまに語りかけられる場面です。そこで、神さまは、ご自分のことを「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」と言われました。

モーセにとっては、アブラハム、イサク、ヤコブは、とっくの昔に亡くなった、遠い遠い先祖です。しかし、神さまは、彼らの神となられたお方です。彼らが地上で死んだからと言って、滅びの中に置いておかれる方ではありません。

神さまは、生きている者の神なのだ、と言われていています。この神さまに捕らえられているなら、たとえ地上の体が死んでも、生きている者とされるのです。やがて終わりの日に、復活と永遠の命が与えられるのです。

生きている者の神であるお方は、とうの昔に死んだ者に対して「わたしはアブラハム神、イサクの神、ヤコブの神である」と言われました。それは、神さまが彼らを捕らえ、彼らを救い、彼らを復活させて下さるからです。

神さまは、わたしたちにも語りかけて下さいます。「わたしは、あなたたちの神だ。」

神さまが、わたしたちの神でいて下さるなら。神さまが、わたしたちを捕らえていて下さるなら。わたしたちは、死んでも、生きる者とされるのです。神さまは、生きている者の神であり、死んだ者を復活させられる神だからです。わたしたちは、神さまに向かうことによって、神さまとの交わりによって、生きている者だからです。

神さまは、御子イエスさまが、わたしたちの罪のために十字架に架かって死なれた後、イエスさまを死者の中から復活させられました。

それは、イエスさまの罪の赦しを信じ、イエスさまと一つに結ばれ、神さまのもの、神の子とされたわたしたちもまた、救いの完成の時、死者の中から復活させられることを、保証して下さるためです。神さまの力によって、永遠の命が与えられていることを示すためです。

わたしたちは、この世の命を終えても、確かに「復活」し、生きることが出来るのです。

わたしたちが、この復活を信じて歩むことが出来るなら。わたしたちは、この世の歩みや人生が、死で終わるものではない。死ぬまでに、自分の喜びを満たしたり、成功したり、多くを手に入れることが、人生の目的なのではない、と知ることが出来ます。

なぜなら、わたしたちの人生の歩みは、すべてを終わらせてしまう滅びの死に向かっているのではなくて、その死を超えている、生きている者の神である方へと、向かっているからです。

わたしたちの人生の歩みは、やがて、復活と永遠の命に与るために。すべての救いの完成に至るために、喜びをもって永遠に神さまに仕える者とされるために。永遠の命と復活に向かかって、進んでいるのです。

しかしそれは、死んだ後が大事だから、この世の歩みはどうでもいい、ということではありません。神さまに向かう歩みは、もう始まっているからです。わたしたちは、もうこの世にありながら、罪を赦され、永遠の命と復活を見つめて、神さまとの交わりを生き始めているからです。

だから、今日の日も、神さまに向かかって、救いの完成に向かかって、一步一步、喜んで、大切に歩いていく。全身全霊を、神さまに精一杯向けて、ますます神さまの恵みへと踏み込んでいく。今日もまた、そんな大切な一日なのです。

#### 【お祈り】

生きている者の神であられる、天の父なる神さま

御子イエスさまの十字架と復活を通して、罪の中にあり、滅びの死へと向かっていたわたしたちを、あなたに向かう者として下さったこと。そして、この世の死の向こうに、永遠の命と復活の希望があることを示して下さい、感謝いたします。

生きている者の神である神さまが、わたしたちの神でいて下さることを、感謝いたします。

わたしたちのこの世の歩みには、喜びも、楽しみも、苦しみも、悲しみも、困難もあります。しかし、日々が、神さまとの交わりの中で、神さまに生かされて、神さまの救いの完成に向かかって、歩む者とされていることを、覚えさせて下さい。

復活の希望をもって、一日一日を大切に歩むことが出来ますように。

主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讚美歌】 518 「主にありてぞ」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讚美歌】 26 「グロリア、グロリア、グロリア」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン